１．人間尊重へ向けた—西洋近代思想—

ヨーロッパ中世（5〜15世紀）…キリスト教の価値観が社会全体を規制
キリスト教（スコラ哲学）の書物に準拠する学び・智慧・感想・発想は制限され、
中世の知識や技術・美徳は、牛頭天王の知識・教訓により再評価される。
キリスト教（ローマカトリック）教会の腐敗と虚偽

文عش((11〜13世紀)→東方貿易の発達→市民の台頭（フィレンツェなど北イタリア都市で）

《ルネサンス（14〜16世紀）》

これを支える精神

キリスト教以前（古代ギリシア・ローマ時代）の文化・芸術の再生と
復活を求める運動

主義・人間性（人間らしさ）の尊重と解放

文学：ダンテ『神曲』、ボルダーリオ『デカムロン』、ラファエロ『アポロとディーダメーデ』
関係：ボッチェリ『西』、レオナルド『イタリアの解体像』、ミケランジェロ『ダヴィデ像』

批評（（1463〜1494）…近代の人間観を切りひらく

批評

1. キリスト教の人間観…「人間は原罪を負っているため、自分では善行はできない」

拡張（アクスティヌス以来）

神の恩恵により、善行をなすようにもたらしている

(2) (1469〜1527）…政治をキリスト教的倫理から切り離す

イタリア（フィレンツェ共和国）の政治学者：外交官

ルネサンス期のイタリア

フランス王室や神聖ローマ皇帝（ドイツ、オースマン帝国）などが周辺諸国の支配と圧迫

イタリア統一への願いから、「統一を実現し得るのか」の君主かを考える

君主による意思決定の伝統とについて述べ、近代的民主を切りひらく

16〜18世紀のフランスで、選挙制度の手続を通じて人間的判断を行う人々

(3)(1533〜1592）…懐疑的立場から真理を追求

著書『質疑集』（フランス語）

自己が何を知っているのか？

「私はこれ知っている」と自分の認識に絞る絶対化せず、
「何を知っている」というのか？

真理を探求し続けるべき

真理を到達するために、あらゆることを疑う

※ソクラテスの「無知の知」を通じる姿勢。デカルト（17世紀）の「方法の懐疑」の先駆

(2)(1623〜1662）…人間の理性を重視、数学者

著書『数学原理』（フランス語）

「人間は自然のうちで最も弱いといけない者の筆に過ぎない。だがそれは…ある」

「考える」ことが人間の尊厳性の根拠とみなす